ダムのある川でも天然アユは増える？

たかはし河川生物調査事務所　高橋勇夫

ダムが建設された河川において、天然アユが減少するという現象が全国各地で起きている。これはある面必然的なことではあるが、「ダムがあっても天然アユを増やそう」という意識がこれまで希薄で、そのために技術開発もほとんど行われてこなかった。このようなことも、ダムの悪影響が直接的にアユに及んでいる一因となっている。

本報告では、約 50 年前に建設された 3 つの発電用ダムによって河川環境が変化し、アユ資源が減少していた高知県奈半利川における天然アユ資源の復元への取り組み（漁協＋電力会社+研究者）とその成果を紹介する。さらに、これまではアユの生死に関わることがなかったような比較的低レベルの濁りが最近になってアユの生残に影響を持ち始めたという今日的な問題についても紹介する。

＜略歴＞

高橋勇夫（たかはし　いさお）

1957 年高知県生まれ。たかはし河川生物調査事務所代表。農学博士。

アユの生活史の基礎研究をベースに、全国各地の河川で漁協の人たちと天然アユを増やす活動に取り組んでいる。同時に、天然アユを増やすための技術開発とその情報発信を行ってきた。主な著作『ここまでわかったアユの本』（共著、築地書館、2006 年）、『天然アユが育つ川』（築地書館、2009 年）、『アユを育てる川仕事』（共編著、築地書館、2010 年）、『変容するコモンズ』（共著、ナカニシヤ出版、2012 年）。